

# 多摩地域におけるめかいつくりの 継承・活用に係わる基礎研究

谷本 寿男(人間社会学部国際社会学科)  
篠田真理子(人間社会学部人間環境学科)  
澤登 早苗(人間社会学部人間環境学科)  
定松 文 (人間社会学部国際社会学科)  
漆畑 智靖(人間社会学部国際社会学科)  
宮内 泰之(人間社会学部人間環境学科)  
荒又 美陽(人間社会学部国際社会学科)  
白石 昌吾(多摩市民、多摩自由大学副理事長)  
浅井 民雄(多摩市民、多摩市民環境会議副会長)

## A Study on Preservation of Traditional Mekai Production Techniques in the Tama Area

TANIMOTO Hisao, SHINODA Mariko, SAWANOBORI Sanae,  
SADAMATSU Aya, URUSHIBATA Tomoyasu,  
MIYAUCHI Yasuyuki, ARAMATA Miyou, SHIRAISHI Shougo  
& ASAI Tamio

### Abstract

The production of Mekai baskets, typically made from tiny bamboo called Shinodake (or Azumanezasa, *Pleioblastus chino* (Franch. et Savat.) Makino), had been a major income-generating activity among small-scale farmers in the Tama Area since the late Edo Era. However, owing to both the replacement by plastic baskets in general and in particular the development of the Tama Newtown area from the 1970s, Mekai basket production has been almost abandoned, and nowadays its production technique is scarcely passed down to younger generations.

This study is to propose a way of preserving traditional Mekai production techniques by enabling the skills to be passed along to the people of Tama, including the sustainable management of Satoyama, the secondary forest on the Tama hills where Shinodake grows.

## はじめに

1960年代から始まったニュータウンの開発から40年が経過し、多摩地域では、残存する里山の維持・保全、高齢化への対応や子育て支援、ゴミや廃棄物への対策といった現代的な課題が山積している。しかし、このような問題がクローズアップされる一方で、必ずしも多摩地域の資源を活かした伝統手仕事などには注目が集まっていない。実際には、地域の中で詳しく見るなら、ニュータウン開発以前からの住民のみならず、新しく住民になった人々の中にも、地域の伝統を再考しようとする試みは少なくない。

本研究は、多摩地域の伝統的な手仕事の一つであっためかいづくりに焦点をあて、その歴史を調査するとともに、技術の継承可能性を探ることを目的としている。初年度の研究では、先行研究の収集・分析を通して歴史・文化的ならびに技術面のレビューをおこなうとともに、新たな試みとして、めかいづくりの原料のシノダケの確保という視点から、この地域で残された里山の維持・保全策についての基礎調査をおこない、また、本報告書は、その成果として、第一章で先行研究から近代資本主義における産業としてのめかいづくりの位置づけと世帯の生き残り戦略として女性の役割を要約し、第二章で、地域における聞き取り調査を通じて、めかいづくりの担い手によるめかいづくりの意義づけを抽出するとともに、調査者の視点から里山保全における意味づけを考察し、第三章において、来年度以降に残る課題などをとりまとめたものである。

この研究を進めていくにあたって、めかいづくりを産業とみなすか生業とみなすかが問題となった。これは、経済・社会史的な観点からのマクロ的視角と世帯内再生産の所得源という民俗史のミクロ的視角の差によるものといっていよいであろう。先行研究においても産業、生業、余業という言葉が使われており、一貫した使用はみうけられない。めかいづくりをどのように位置づけるかは、研究としてのポジショナリティに深くかかわる問題であり、今後の聞き取り調査の積み重ねとより詳しい史資料によって適応した概念を採用したい。本論では、仮説を組み立てる前の先行研究の要約として、外部市場とのつながりを持った多摩地域のめかいづくりという地域研究の立場から産業という言葉を使うこととした。また、生産物・製品としての「め

かい」と作業や仕事としての「めかいづくり」という言葉で使い分けた。次は、原料と材料という言葉の使い方についても、本研究では、めかいづくりに使用されるシノダケ(一部では、正式和名のアズマネザサ、*Pleiblastus chino* (Franch. et Savat.) Makinoと標記)を「原料」と記し、シノダケから加工されるヒネなどを「材料」と示すといった区分を行った。めかいづくりの行われてきた行政区としての八王子・多摩・稲城・町田を多摩地域、また雑木林を里山という言葉で表記することとした。

なお、本研究は、2009年度恵泉女学園大学園芸文化研究所からの研究助成によって行われたことを付記しておく。

## 第一章 めかいづくりに係わる先行研究の確認と若干の考察

この章の目的は、多摩地域のめかいづくりに関する主要な先行研究の検討を通して、その基本的な事実や仮説を確認することにある。本章は、社会科学的な視点からの考察であり、特に、めかいづくりを市場向けの産業としてとらえ、主に、その経済・社会的な背景に着目して先行研究を整理した。

### 1. 産業としてのめかいづくりの起源とその展開

多摩のめかいは多摩丘陵に自生するシノダケを原料とした適地生産品であり、関東の山間部から東北地方に展開する「シノダケ製竹籠地帯」ともいべき生態学的広がり<sup>1)</sup>に属している。文献上の記録では、めかいづくりの起源は江戸期の天保年間といわれており、発祥地は、絹織物業で繁栄する八王子宿近くの由井村とされ、この経済の中心からめかいは東へと伝播していった結果<sup>2)</sup>、多摩村が最大の生産地となり、由木村がこれに続く地位を占めるに至ったとされる<sup>3)</sup>。

以上の起源が現存する記述資料という限られた文脈において正しいとすれば、めかいづくりは近世末期の八王子を中心とする市場経済の発展<sup>4)</sup>を背景に農家の副業として市場向けの産業となり、明治維新後の近代産業革命の進行に合わせて販路を拡大し、大正時代に全盛期を迎えた<sup>5)</sup>在来的な内需産業だったといえる。

## 2. めかいづくりの生産様式と女性の役割

### (1) 農工未分離の資本節約型小農経営の家内制手仕事

近代資本主義の経営主体の理念型が経営と家計の分離や資本の有機的構成の高度化によって特徴づけられるとすれば<sup>6)</sup>、めかいづくりはその対極の産業であった。それは養蚕・生糸や炭焼などを多角的に経営する多摩の農家による冬の農閑期の副業であり<sup>7)</sup>、したがって農工未分化状態の家族という経営主体による手仕事であった。また、老若男女、家族総出の分業によって営まれる家内工業でもあり、それぞれの工程を家族の各成員が専門的に担うことで技術と生産性の向上が図られてきた<sup>8)</sup>。原料であるシノダケの調達から製品完成までの全工程が市場を媒介しない家族内分業だけで実行可能という特徴もあったが、ハザルという中間製品を仲買に売却するケース<sup>9)</sup>やシノダケを販売する専門店<sup>10)</sup>が存在した点で市場を媒介とした分業が部分的には進行していた。

また原料のシノダケは多摩丘陵の里山で、対価を支払わずに「盗む」という形態でも調達可能であり<sup>11)</sup>、めかい包丁の購入を除いてはほとんど資本もいらず、必要であるのは、賃金を支払う必要がないとみなされていた家族という労働力、そしてめかいづくりの技能のみという極端な資本節約型産業でもあった。そのため、めかいづくりは、地主、自作農、小作農から構成される村落的社会階層の下位を占める零細な農家によって主に担われ、彼らの貴重な現金収入源となったとする仮説も提示されている<sup>12)</sup>。

### (2) めかいづくりにおける女性の役割

ところで、1960年代後半以降、典型的とみなされた核家族は、夫は仕事、妻は家事・育児・介護という性別役割分業によって社会的に構成され、かつ経営的機能を喪失した私的な消費領域によって特徴づけられるものであるが、これとは対照的に、多摩地域の零細な農家は、経営と家計が未分化な状態にとどまっていたため、直系の三世代の老若男女が役割に応じて多種多様な生産的かつ再生産的な労働に従事するという拡大家族であった。そこでは、妻は夫の母とともに家事労働のみならず、農業と副業の双方において実質的な役割を果たしていた<sup>13)</sup>。めかいづくりにおける家族総出の分業生産はこの一般的傾向の具体例に過ぎない。

ただし、めかいづくりにおいて女性の役割は特に大きかった。一家族内でめかいづくりをする生産者の男女比率は女性のほうが高かったことが統計的に確認されている<sup>14)</sup>。この事実は、めかいと同じ農閑期に行われた副業の炭焼が主に男性の仕事とされたという男女間の分業の必要性<sup>15)</sup>、力仕事は男で、手先が器用なのは女という特有のジェンダー認識<sup>16)</sup>、あるいはめかいづくりの副業的位置づけやめかいの実用的性格<sup>17)</sup>などに由来するのかもしれない。

技術的側面から見ると、めかいの形を作る中核的かつ最も高度な技術は、社会化を通じてめかいづくりに熟練した女性のみにも可能なものだった。また、めかいづくりの技術の大半はいわば暗黙知的<sup>18)</sup>で、家庭内で幼少より時間をかけて体験的に身に付けられる傾向にあり<sup>19)</sup>、標準化や機械化に馴染まないものであった。それゆえ、めかいづくりの技術という文化資本を身に付けた女性、すなわち無賃の可変資本を結婚によって獲得しようとする傾向が生まれ、これによって広域的な技術伝承が行われたと言われる<sup>20)</sup>。

### 3. めかい生産者を取り巻く社会関係に関する若干の考察

#### (1) 零細な農家とヤヌスとしての資本主義

めかいづくりは大正期に全盛を迎えたのであるが、その背景にあってめかいづくりに市場を提供した近代資本主義は、その主な担い手とされる零細な農家にとって慈雨であった。しかし同時に、資本主義は多摩地域の零細な農家の生活を脅かす存在でもあった。資本主義の基盤をなす土地の私的所有を法制化した地租改正は重い租税負担となり、地主制の確立をもたらししたが<sup>21)</sup>、産業革命を経た大正期には、借金苦や税金未納などの深刻な社会問題が発生したとされる<sup>22)</sup>。ここに、資本主義はめかいの販路を生み出し、零細な農家を救ったが、しかし、零細な農家を追い詰め、めかいに現金収入を求めざるをえなくしたという因果関係が見出されないであろうか。共同体は内部で維持できなくなった時に外部を必要とする。近代国家の租税制、貨幣経済の浸透、教育資材購入などによる世帯における現金収入の必要性が市場向け商品の生産への傾斜に拍車をかけた。そして昭和期に入ると、金融恐慌と世界恐慌が勃発したために、農産物や特産品のめかいや繭の価格は暴落し、多

摩地域の農村は壊滅的な打撃を受けた<sup>23)</sup>。その後、紆余曲折を経て、第二次世界大戦の頃までにめかいづくりの全盛期は過ぎ去ってしまう<sup>24)</sup>。

無論、戦前における農業と在来産業の成長という要素を看過するべきではないが<sup>25)</sup>、めかいづくりの担い手とされる多摩地域の零細な農家の生活は決して楽なものではなかったといわれる<sup>26)</sup>。めかい研究の第一人者と言える坪郷英彦は、「『目籠』作りは貧しいと思われた過去の思い出とともに意識的に忘れられようとしている」と指摘している<sup>27)</sup>。このことは、今後のめかいづくりの継承を模索していく際に、是非とも心に留めるべき重い言葉であろう。人は負の記憶と認識するものを積極的には伝承しようとはせず、記録にも残さない。なぜ伝承されにくかったのかを考える際に、忘れてはならない点であり、文献資料の限界を示唆するものである。

## (2) めかいづくりと村落共同体

ところで、資本主義は村落共同体を解体する圧力を多摩地域の農村に対して不断に加え続けていたと考えられ、特に、農村人口の流出という影響は直接的でかつ深刻であり、実際に、村から出て八王子の製糸工場の女工となった若い女性も少なくなかった<sup>28)</sup>。前述したように、めかいづくりは家族総出の分業による生産であり、特殊な技能を身に付けた無賃の女性が不在となれば、成り立たないはずのものである。しかし、第二次大戦前には、めかいづくりは産業として成立していた。このこと自体、現金収入の必要性ということから、多摩地域の村落共同体、特に、その核となる拡大家族の解体が最小限にとどまっていたとも解釈できる。

ややもすれば、産業革命で出現した近代産業の華々しさに目を奪われがちであるが、第二次大戦前の日本は農業国であり、第二次・第三次産業就業人口の約六割は近世以来の「在来産業」であった<sup>29)</sup>。産業革命を牽引した繊維産業もその裾野に家内制の織物業や生糸、養蚕という形態で農村産業を抱えていた<sup>30)</sup>。一般に、こうした在来部門は無視できない大きさの農村における産業を構成しつつ、そこにおいて所得と労働力の必要性を創出し、村からの人口流出を抑えたのである<sup>31)</sup>。そして、多摩地域の農村でも事態は同じだったと考えられる。めかい、生糸、炭焼さらには草鞋といった多摩地域の農村



の在来産業の展開は、多摩丘陵の自然の恵みを活用した「相対的な自給自足性」<sup>32)</sup>と相俟って、人口流出を抑制し、村落共同体と大家族の形態を維持する機能を果たす側面を持っていたと言えまいか。この共同体維持機能に関する評価をめぐっては、マルクス主義経済学と近代経済学の間で深刻な解釈の相違が存在する<sup>33)</sup>。こうした争点を含め、以上のような新しい視点から多摩地域のめかいを再検討することも必要な作業だと言えよう。

## 第二章 めかいづくりの伝承と里山の維持・保全策

### 1. 今年度の活動

研究の初年度にあたり、上半期には、最初の打合せ会における意見交換を踏まえて、多摩地域のめかいづくりの関連する資料・情報の収集と分析を進め、めかいづくりの担い手の方々への聞き取り調査をおこなった。下半期には、上半期の活動の成果にかかわる意見交換を経て、恵泉女学園大学が所有する自然観察林におけるシノダケの生育調査・めかいの材料のヒネ作りから実際に籠を編むという活動に展開した。限定的ながらも、下半期には佐渡島とインドネシアにおける竹細工の現地調査も行い、それぞれ参考資料-1および参考資料-2にその概要をとりまとめた。この初年度の成果は、2月の第二回研究会において議論し、この報告書に集大成されている。なお、2009年度の活動概要を参考資料-3として示しておく。



写真-1 第一回研究会  
(2009年11月7日撮影)

### 2. 伝承に係わる聞き取り調査とその知見

第一章で述べたように、多摩地域におけるめかいづくりの特徴や技術の詳細については、多数の研究結果が出されており、伝承者や仲買・仲介者などへ

の聞き取りも行われている。しかし、それらの先行研究の多くは、おおよそ10年前までに刊行されており、その後にはめかいに関する記憶が薄れていっていることも想定される。これを踏まえて、本研究の独自の視点を確立することとともに、現時点において多摩地域の人々がめかいづくりにどのように係わり、捉えているのかを把握するために、既存の文献で取り上げられていない関係者の方に聞き取りを行った。

(1) 伊野澄氏(多摩市東寺方)からの聞き取り調査の概要

母親(明治38年=1905年生まれ)はめかいづくりの名人で、伊野氏自身は子どものころシノダケ切りとヒネヘギ(皮むき)くらいしかしたことがなかったという。昭和49年に都職員として多摩動物園に着任し、身辺が落ち着いてきたことで、動物園の周辺にシノダケが多いことに気づいた。子どものころにめかいづくりの手伝いをやったことを思い出し、その時はまだ母親が健在であったので、作り方を習って作りだした。もともと手を使って何かを作るのが好きで、今でも注連縄作りや魚籠なども自作している。めかいづくりは母親のやり方を真似て、自分で工夫している。まだ十分に満足できるものは作れていない。現在は都立桜ヶ丘公園の雑木林ボランティアの人たちにめかいづくりを教えている。



写真-2 伊野氏によるヒネヘギ作業  
(2009年7月5日撮影)



写真-3 伊野氏製作のめかい  
(2009年7月5日撮影)

(2) 小谷田孝之氏(八王子市東中野)からの聞き取り調査の概要

実父の小谷田英一氏は、自宅の庭にさまざまな種類のめかいやめかいに関連する資料を展示するめかい資料館を建設した。この資料館は見学希望者に開放されている。この資料館を作ったきっかけは、英一氏自らがめかいの



仲買人をしてきたことからである。この資料館には販路のリストも展示してあるが、これは孝之氏が父から聞いたものをまとめたものである。孝之氏は、子どものころはシノダケ採りに行かされたが、自分ではめかいを作ることにはしないとのことである。両系の祖母のイソさん、ソノさんはめかいづくりをおこなっていた。



写真-4 小谷田氏宅めかい資料館  
(2009年7月25日撮影)



写真-5 小谷田氏宅聞き取り調査  
(2009年7月25日撮影)

### (3) K氏(八王子市堀之内)の聞き取り調査の概要

現在K氏宅の庭にある二階建ての離れ(以前は納屋だった)の二階において、「里山農業クラブ」のメンバーがめかい作りを行っている。「里山農業クラブは、“農なくして里山なし”を基本方針として雑木林管理、谷戸田での稲作、竹炭焼き等の様々な農業活動の実践により里山を保全再生している団体で、この活動を通じてまち作りや田んぼの学校等の環境教育活動も行っている。めかい作りもその一環で、雑木林の保全、資源の有効活用、伝統技能の伝承普及等のために行っている」<sup>34)</sup>。K氏と、T氏という女性とでめかいづくりを教えはじめたことにより、現在では10数名がめかいづくりを行えるようになった。T氏は作業が早く、仕上がりも美しいので、めかいを販売すると一番よく売れる。K氏は子どものころにみようみまねでめかいを作っていた。7年ぐらい前から、この活動を行うようになって徐々に思い出してきた。手作業で物を作るのが好きだが、めかいばかり作っていると飽きてしまうので、魚籠などの竹細工を手がけたいとのことである。



写真-6 K氏宅における里山農業  
クラブのめかいづくり活動  
(2009年10月15日撮影)



写真-7 里山農業クラブで製作された作品  
注:春のフラワーフェスティバル由木で販売  
される。(2009年10月15日撮影)

#### (4) 聞き取り調査からの知見

このように、ごく少数ではあるが、現在もめかいづくりに関わっている方たちに聞き取りを行い、大きく以下の3点が明らかになった。

第一に、めかいづくりの記憶が家族の記憶として繋がっていることである。母親が作っていたから、大人になって作り始めたというのが伊野氏である。父親がめかいの仲買人であり、祖母が作っていたということから、めかいの製品やその関連資料を収集し、資料館を運営しているのが小谷田氏である。里山農業クラブのK氏もめかいづくりは子どものころの記憶とつながっている。彼らにとっては、家族が作っていたこと、子どもの頃にシノダケ採りを中心とした限定的な関与ではあったが、自分もそれに関わっていたという記憶があることによって、現在もめかいづくりに関わることの契機と経験の土台になっていると考えられる。

第二に、趣味・楽しみの領域でのめかいづくりやめかいの収集に携わっていることも特徴としてあげられる。多くの趣味の中で、単純作業の繰り返して飽きるという側面や、魚籠など他のものも作りたいという別の作業への意欲も認められる。めかいづくりを行うこと、めかいを収集・研究することの意義付けという選好のひとつとして、めかいづくりという手仕事にかかわりだしたという特徴が浮かび上がってくる。

第三に、めかいづくりと多摩地域の残された里山の管理との繋がりがあげられる。里山農業クラブのK氏の聞き取りにもあるように、里山づくりのグ

ループが、資源としてのシノダケに着目し、めかいづくりを行っているということは、非常に注目すべき動きであるといえる。多摩ニュータウンの開発とともに、シノダケが採れる里山がなくなっていくことは、めかいづくりの成立基盤を崩壊させるひとつの大きな要因であった。しかし、多摩地域には公園緑地や開発の手が及んでいない里山なども残されており、そこでは逆にシノダケの管理が大きな問題となっている。シノダケを有効活用するためにめかいづくりを行うということは、このような里山に新たな価値付けを行うことに結びついていくであろう。一度は衰退しためかいづくりであるが、家族の記憶にまつわるものとして、趣味の領域として、さらには里山管理とのつながりとして、めかいづくりは現時点でも関心を持たれている。

### 3. 原料のシノダケ確保のための里山保全と材料のヒネ作り活動

本研究は、単に先行研究の分析やめかいづくりに携わる人々への聞き取り調査のみならず、多摩地域の資源をどのように活用できるかという研究と社会活動の実質的連携を試みるという一種のアクション・リサーチも含んだ活動をも目指している。めかいづくりに関して、大学の有する自然と人的な資源をどのように活用できるかを体験実証的に考察してみたい。

恵泉女学園大学は、めかいづくりが行われている多摩地域に位置しており、したがって大学の周辺においてもめかいづくりの原料としてのシノダケが採取されていたと推測される。大学の所有する自然観察林に実際に生育しているシノダケがめかいづくりの原料として適しているか否か、また、めかいづくりの原料の供給地としての里山の管理のあり方を模索することを目的として、この自然観察林においてシノダケを採集し、それを用いてヒネヘギ作業を行った。

#### (1) シノダケ採集活動

これまで20年余にわたってめかいづくりを地域の人々に教えてきた菊地富士江氏の指導を受け、多摩市で竹細工づくりの活動をおこなっているNPO 男性ボランティア会議の鈴木幸夫氏と長瀬敏雄氏にも協力をいただき、この研究会のメンバーの教員および学生有志がシノダケの生育調査を行い、原料に適するとされている今年生えたシノダケ(シンコ、ニイコ)を採取した。

実際に、シノダケの採取作業を行うにあたって、菊地氏から以下の説明があった。

- a) めかいには、その年の春に生えた1年ものを使う。その見分け方として、先端部だけ枝分かれしていて側枝が生えていないものがそれに該当する。めかいづくりの材料となるヘネヘギ作業のために、特に注意すべきことは、虫が食っていないものを探すことである。虫が食っていると、ヘネヘギ作業の途中でヘネが切れてしまうためである。
- b) 切りとったものの、材料として適さない細すぎる先端部や太すぎる根元部分、切り出したものの虫食いなどが原因で適合しないものは、まとめて山に戻すが、その際には、横倒しに放置せず、次に山に入った人が踏んで滑らないように、地面に突き指して立てておくことがマナーである。

これらのことは菊地氏が、小野路在住の故萩生田長吉氏から厳しく指導されたことであるという。a)に関しては、今後、実際にめかいづくりに従事する方々から詳細に聞き取りを行う際の一つの手がかりとなる項目といえる。めかいづくりが盛んであった時代には、「山から篠を伐ってくるときは生えているものを選ばず全部伐ってきた」<sup>35)</sup>という証言もあるが、シノダケを採取する場所によってつくりやすさ、折れやすさの違いがあるという話も残っている<sup>36)</sup>。こうした原料としてのシノダケの品質は、製品であるめかいの品質とも関連していたと推測される。品質の高いめかいの作り手は里山の生態系のよき保全者であり、仲買人もそれを把握していたという言葉に示されている<sup>37)</sup>。シノダケの伐採方法についての詳細は、里山の生態系への影響という側面と、最終製品としてのめかいの品質という側面との両方から考察することが出来るだろう。めかいに適したシノダケが大学の自然観察林に存在するとしても、それが良い品質のものであるかどうかについて、またどのような局所的環境が良い品質のシノダケを産生するのかについて、今後も検討が必要である<sup>38)</sup>。

次に、b)に関しては、さまざまな慣習がそれぞれの地域に存在した可能性があるが、現在までの先行研究ではあまり言及されていない点である。山に入るときの作法は、コモンズとしての里山の管理運営にまつわる慣習として重要であると考えられる。今後詳細な聞き取りを進めていく上で一つの着

目点になると考えられる。

めかいづくりに適したシノダケは、比較的日当たりのよい里山の林縁部に見られるというが、しかし、今回、採取を行った大学の自然観察林では、めかいづくりに適したシノダケ数は、さほど多くはなかった<sup>39)</sup>。昨冬、全面的に刈り込みを行ったことが影響していることも考えられる。一度刈った場所は、数年待たないと勢いのよいシノダケは生えてこない可能性があるが、別の要因によるものかもしれない。恒常的にシノダケを採取するためには、一定の場所のすべてを刈り取るのではなく、採取や刈り取りを休ませるサイクルを組んでいく必要があるかもしれない。これは数年をかけた観察が必要であり、今後の検討課題である。

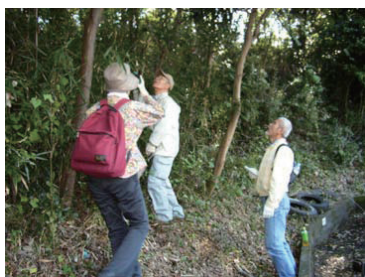


写真-8 シノダケ採り  
(2009年11月7日撮影)



写真-9 採取されたシノダケ  
(2009年11月7日撮影)

## (2) ヒネヘギ作業

ヒネはめかいづくりの基本になる部分で、シノダケの皮の部分を剥いて作る。ヒネの作り方については、先行研究でも図入りで示されているため<sup>40)</sup>、ここでは説明を省略する。

今回の作業への参加者全員がこのヒネヘギ作業の難しさを感じとった。ヒネヘギではある程度の熟練がどうしても必要である。このヒネヘギの難しさが、シノダケを使っためかいづくりの伝承を困難にしている一因といってもよいであろう。このようなヒネヘギの難しさを回避するために、シノダケを原料としたヒネではなく、クラフトテープで編み方を教えている例もある<sup>41)</sup>。





写真-10 ヒネヘギ作業  
(2009年11月7日撮影)



写真-11 めかいづくり体験  
(2009年11月7日撮影)

### (3) シノダケ採取からヒネヘギ作りの活動から分かったこと

作業に携わった学生から感想を聞いたところ、次のような点が挙げられた。

- ・ 一見固そうに見えるシノダケを切ってみたところ、瑞々しさ、匂い、しなやかさがあることに強い印象を受けた。
- ・ 採取日は、シノダケが水揚げをしなくなった時期であるにもかかわらず、瑞々しいと感じた。さらに夏季には水が染み出すほどであるとの説明で驚いた。
- ・ 里山に踏み入って原料であるシノダケの植物としての性質を知り、素材感、材質感に触れることで、体験者は感覚的にさまざまな刺激を受けた。
- ・ また、里山にはびこるシノダケが、めかいという有用物になることを実感し、これは林産物の有効な活用法であることが理解できた。

上記のように、原料としてシノダケという植物を用いること、それが身近なところに生育していることが強い印象を与えることが明らかにされた。このことは、めかいの伝承のあり方を考えていく上で重要な点になると考えられる。はじめてめかいづくりを経験する人に対して、まず原料について知ってもらい、めかいづくりの技術を学び、楽しんでもらうという段階があり、さらには、それだけでなく原料のシノダケの特質と周辺環境へも興味をもってもらうという展開である。そして、関わった個々人がそれぞれの興味に従って、めかいとの付き合い方、めかいを通じた学び方を取捨選択していくことが望まれる。すなわち、制作方法を伝え楽しませることを主



とするのか、それとも原料としてのシノダケを通じて植物の特質や周辺の環境への意識を醸成することを重視するのかという点である。

#### (4) アズマネザサ(シノダケ)の生育適地について

産業としてのめかいづくりを考察するにあたって、原料の特殊性による地域限界を考慮に入れることは必須である。そこで、めかいづくりに適しているとされるシノダケ(アズマネザサ)の生育地に関する調査を植物学からの見地に入れることにした。

多摩地域のめかい編みに使用するシノダケは俗称であり、植物分類学上の正式和名はアズマネザサに相当する。本項では植物社会学的な見地を含めて検討を行うため、シノダケをアズマネザサで統一表記する。

2010年11月7日に引き続き、11日に再度、大学の所有する自然観察林の調査を行った。その結果、参考資料-4の図に示すように、林内にある落葉広葉樹林の下に、めかいづくりに適するアズマネザサが生育していることが分かった。以下では、最初に恵泉の裏山の概要に触れ、その後、上述のアズマネザサ生育地管理方針について検討する。

この自然観察林は小野路より続く尾根の末端部に位置し、この尾根上に南北に連なる2つの小ピークのうちの南側のピークを中心とする部分である。北部は浅い谷状斜面、南部は西方と南方へ伸びる尾根と南西部の斜面からなる。裏山の植生は概ねコナラークヌギ林であるが、林床植生は部分的に若干異なる。北部はピークから谷状斜面を中心にウグイスカグラ、クロモジ、コゴメウツギ等の二次林内によく見られる低木が繁茂している。一方、南部は上記低木に加え、アズマネザサが高密度で繁茂している。また、林縁部にはアズマネザサ、クズ等からなるマント群落が形成されている。

めかいづくりに適するアズマネザサが生育している地点は、ピークから尾根沿いに20mほど南方に進んだ南向きの尾根上に当たる。この一帯は林床にアズマネザサがやや密度濃く繁茂している。また、尾根上に位置することから、特に落葉期は林内の日当たりが良く、土壤が比較的乾燥かつ酸性化しているものと推測される。アズマネザサは酸性土壤で旺盛に繁茂するとの報告があり<sup>42)</sup>、一般的には日当たりの悪い谷部よりも、林縁や尾根筋のよう

に日当たりがよく、乾燥した場所に多く見られる傾向がある。したがって、上述の地点は、アズマネザサの生育適地として矛盾するものではない。

養父<sup>43)</sup>によると、管理されないために荒廃した雑木林は、関東地方では林床植生の形態により、つぎの2つのタイプに大別される。毎冬に下刈りと落葉かきが継続され、アズマネザサが散在していたコナラ・クヌギ林では、管理が停止された以降は、アズマネザサが旺盛な成長を開始し、稈高が2~3m以上に達して密生状態に繁茂する。一方、下刈り、落葉かきなどの生産的植生管理の強度が弱く、低木類の衰退が著しく進まなかった雑木林は、下刈り停止以降には、アズマネザサが密生化せず、二次林に特有な低木が繁茂する。そして、町田市等の大都市近郊に位置する地域には前者が相当する。

以上のことから、めかいづくりの維持と展開のためには、めかいづくりに適したアズマネザサが現在生育している南部の尾根一帯を、今後はめかいづくり用のアズマネザサ採取地として管理していくべきであろう。管理方針としては、現状維持が望ましいと考えられる。ただし、めかいづくりに適したものは一年生のアズマネザサであるため、アズマネザサの刈り取りを行って、一年生の稈を萌芽、更新させる必要がある。刈り取りの際には、間引き、もしくは面的な刈り取りのいずれが適しているのか不明である。したがって、双方を実験しながら適正な方法を模索していくべきである。また、アズマネザサの生育状況を継続的に観察しながら、アズマネザサやその他低木が過度に繁茂することが予想される場合には、それらを適度に間引いていく必要がある。持続可能な環境保全と産業展開を射程とした実証的研究では、このような自然環境面からの提言も織り込み、伝承を試みる必要があると考える。

### 第三章 今後の課題

以上に述べてきた今年度の研究の結果、多摩地域のめかいづくりについて、歴史・文化、あるいは技術的な側面に関しては既に多くのことが明らかになっており、めかいづくりの伝承者や担い手の方々の数も非常に限定的になっていることから、聞き取りを主体とする現在の手法では、先行研究の成果を越えるような知見の習得には限界があるとの認識にいたった。しか

し、成果としては、多摩地域において残存する里山の維持管理の視点からは、従来は無用というよりは邪魔者・厄介者とされていたシノダケを適正に管理することによって、この地域の伝統手仕事であるめかいづくりの原料として活用できるのではないかとの新たな発想が出てきた。

めかいづくりは、一時期は多摩地域の零細な農家にとっての所得源として産業となっていた。伝承者や担い手も制約のある現状からみれば、確かに、多摩地域のめかいづくりは、今では産業の観点からは完全に崩壊したということになるが、その一方で「多摩地域のめかいは非常に質が良いので、できれば復活して欲しい。需要はまだまだ根強い」という声も確認されている<sup>44)</sup>。しかし、これからは、多摩地域の新住民の趣味や楽しみとして、さらには学校教育の一環として組み込まれるような組織作りをおこない、その伝統文化・技術の継承を進めていくことが必要である。

以上のような成果を踏まえ、2010年度以降は次のような課題に取り組んでいくことを計画している。

## 1. 多摩地域の歴史としてのめかいづくり産業と領域性

### (1) 多摩地域の産業としてのめかいづくり

多摩地域は、大都市に近接しているために、近代以降にはめまぐるしい時代状況の変化に対応し続けることを余儀なくされてきた。めかいづくりがこの地域の産業として確立した理由も、東京という市場との近接性が背後にあると考えられるが、絹の道に程近い立地において行われてきた養蚕との関係も指摘されている<sup>45)</sup>。また、めかいの衰退の原因としては、いわゆる経済発展にともなう竹や笹製品に代わるプラスチックや金属製品などの代替品の普及があり、さらには、多摩地域の固有の原因としての多摩ニュータウン開発による産業や社会の構造の変化もあげられる。坪郷が指摘する「細いヒゴが作れるか否かが専門的技術と副業的技術の違いであった」<sup>46)</sup>から、竹や笹の手仕事が専門的な工芸品の域に達したか、あるいは副業的な産物の段階に留まったかの技術的な分岐が暗示される。これを多摩地域のめかいづくりに当てはめてみると、残念ながら副業的な産物の段階に留まったということになる。この点からは、原料であるシノダケの材質によるものか、あ

るいは編み方などの技術によるものか、さらには製品であるめかいの使用目的によるものかといったことの検証が求められよう。現在でもシノダケを原料とする手仕事で東北地方のいくつかの場所で産業として成立している<sup>47)</sup>。さらには、まだ日常的に一般家庭においても使われているかという需要からの検証も行うべき課題といえよう。多摩地域のめかいづくりに関しては、ニュータウン開発にともなう新住民の数が絶対的多数となり、伝統的な手仕事であっためかい製品への需要がなくなってしまったということも衰退の特殊な原因として想定される。このあたりも今後の聞き取り調査の課題と認識している。

近代以降、1960年代くらいまでの比較的短い期間に地域の産業の一角を担っていた多摩地域のめかいづくりの実態については、来年度以降も歴史資料の分析と関係者への聞き取りを通じて明らかにしていきたい。ただし、既存資料を越える新しい歴史資料の入手はほとんど不可能と判断されることから、産業人口統計や世帯構成変動などの統計資料の精査については、今までに多くの調査を行っている多摩市教育委員会ならびにパルテノン多摩などとの協力関係を結ぶことなどで行っていく計画である。

## (2) 都市開発と共同体領域の変容

産業としてのめかいの実態については、第一章および第二章において示されたように、歴史資料の解読と関係者への聞き取りとによって、多くのことが明らかにされている。しかし、現在の行政区画を越えてのめかいづくりが、地域をどのように結び付け、また分断していたのかについては示されていない。めかいづくり自体は家内工業として行われていたが、原料であるシノダケの仕入れ、出来上がっためかいの仲買人への引渡しなどが、どの程度の広がりで行われていたのか、流通としての市場の形態と広がりを調査しておくことは重要であろう。既に見てきたように、めかいづくりの衰退に多摩ニュータウン開発が関与していたのは事実であろう。この研究によって開発が途絶えさせた共同体の姿を示し、現在の行政区画の形と比較しながら、その領域設定の可能性と限界に考察を進めていくことも今後の課題の一つと考えている。

## 2. 多摩の社会構造とめかい

### (1) 社会グループという観点からのめかいづくりの担い手とその変容

家内工業として実施されてきためかいづくりは、その編む作業を担当した女性の役割が大きかった。第一章でも示したごとく、その技術を持つことが女性にとって地域の結婚の条件であり、「嫁」をもらう「家」としては世帯の生き残り戦略として大きく作用した時代もあった。また、どちらかといえば零細な農家の副業として実践されていたとされる。他方で、現在に続くめかいづくりの技術の伝承には、地域の地主層の男性が大きな役割を果たしているようである。このような担い手のとらえ方が正しいのかどうか、もしそうであるなら、その関係性を示すことは地域の社会構造について考察する上で重要になるだろう。また、多摩地域では、いくつかのめかいづくりの講習が行われている。これらの講習を受講している市民には男性も女性もいるが、彼らがどのような社会層、年齢層に属しているかを明らかにしていくことも、めかいづくりの継承の可能性とその方向性を探るために重要といえる。

### (2) 伝統の活性化とめかいづくり

伝統や文化は、「遺産」や「保全」の対象となりがちであるが、過去と同一の現在が存在しないのは自明のことである。しばしば伝統や文化は保存することに精力が注がれるが、実のところ変化する柔軟性を持つことこそが伝統や文化を維持、活性化させるのである。このような視点にたち、今一度めかいづくりをとらえ直すならば、技術や伝承のあり方、産業や起業としての位置づけにおいて変化や変容がめかいづくりの活性化につながるといえる。

地域の伝統的な手仕事としての継承が模索されているめかいづくりであるが、歴史的に実践され、地域の主要産業であった時期は比較的短い。また、歴史的なめかいづくりと現在のめかいづくりには相違点もある。それがどのような連続性と非連続性の上に成り立っているかを明らかにし、その可能性と限界について示しておくことが必要であろう。

## 3. 多摩の文化としてのめかい

### (1) 竹細工のなかでのめかいの特性、めかいに使えるシノダケの特性

多摩地域のめかいづくりを伝承していくためには、全国に、さらには世界

に存在している竹細工と比較した多摩のめかいづくりの特性をある程度明らかにしておくことが有効である。シノダケという笹の一種を利用していることは、原料そのもののやわらかさを補うために四つ目編ではなく六つ目編にするという技術を生み出し、それが製品の繊細さにも寄与した。同じシノダケを使うとしても、横浜市<sup>48)</sup>や東京都江戸川区に残るパイスケのように頑丈なつくりになっている製品もあり、めかいつくりに使えるシノダケにも特徴があると考えられうる。それが里山の管理手法に由来するのか、土壌に由来するのかなど、竹文化圏における多摩地域の特徴を明らかにしていきたい。

## (2) 技術伝承、めかい包丁などの道具の継承、製品の利用方法の提案

多摩のめかいつくりに関心を持つ市民は少なくなく、従来から様々な形で講習会などが開かれている。しかし、短い講習会ではめかいを編むところ以外の実践が難しく、熟練が必要な材料のヒネヘギまで継承している人はわずかである。そこで、文化と技術の継承の核として教育機関の有用性はあるだろう。恵泉女学園大学の公開講座、サークル活動を通じ、一貫した技術の伝承システムを構築する可能性を探っていく。また、とりわけ材料のヘネヘギ作業に必要なめかい包丁などの特徴的な道具を提供できる鍛冶職人は、めかいの技術の継承者よりさらに少なく、道具をいかに維持できるかも課題として残っている。

さらには、現代社会のニーズにあった形でめかい製品をつくり、販路を開拓し、どのように見せ、どのような人に買ってもらうのか、現在の市場におけるニーズとの適応をさぐることも継承の一つの方策であり、その提案も課題である。

山口智子は、日本の伝統工芸や日本的な美を「掛けたくなる軸」という連載<sup>49)</sup>で紹介している。山口は、残したいと思う工芸品や製品に出会い、その作り手に熱心に手紙を書き、どのような環境や状況でその技術と製品が生まれ、受け継がれているのかを訪ね歩いている。また、青山の国連大学の前で土日に行われる有機農産物のマーケットは回を重ねるごとに盛況になっているが、その一角に生活用品として世界各地の竹細工を販売している店がある。さらに、20代、30代をターゲットにしたインテリア・小物雑貨の店には、



アジアのものも含めて竹製品がおいてあることが多く、竹製品そのものの需要がなくなったわけではない。市場経済の中で商品を製作し、販売することは疎外感を生むこともあるが、今ある多摩地域の資源を単に伝統として位置づけるだけでなく、現在の社会生活において日常の必需品として、そして何らかの付加価値を付けることで、新たなめかいづくりの展開が望めるであろう。地域の研究・教育機関としては、こうした新たな価値付与と発想をうながす機能も期待されているのではないだろうか。

#### 4. 多摩の自然とめかい

##### (1) 産業・生業からマイナー・サブシステムへ

多摩地域における季節的な作業の循環のなかに、めかいづくりは位置づけられていた。春夏には農作業の傍ら養蚕を行い、冬期のめかいづくりという営みは、生計を立てるための必要性和結びついてきた。需要にこたえるために、時には明け方まで一家総出でめかいづくりを行ったという記録も多く、作り手にとってつらい、負担の大きな仕事であったことが推測される。

上述したように、産業としてのめかいづくりは複合的な要因によって衰退したと考えられ、現在それを単純に復活させることは非常に困難であろう。

しかし、新たな視点によってこれからのめかいづくりを捉えなおすことは可能であると思われる。生業としてではなく、「遊び仕事」ともいわれるマイナー・サブシステム<sup>50)</sup>としてめかいを捉えなおすことによってである。手仕事として熟練することによって、作ることそれ自体の楽しみ、腕が上がることの喜び、人に教えることの誇り、製作物を人に贈ることによるつながりの創出等が生まれると思われる。また、失われつつあるとはいえ、現在でもシノダケを採取することができる里山は存在していることから、原料の採取から製作までを一貫して地域内で行なうことが可能である。そこには次項で述べるように資源としてのシノダケを通じて多摩の里山とかわり、自然環境に実感しつつ接するということも含まれる。

多摩においてめかいづくりが継続していくには、多摩の人々によって、経済的側面だけではなく遊びの側面を強く有するめかいづくりが行われていくことが鍵になるのではないかと思われる<sup>51)</sup>。さらに、「遊び」の重要な要素

である自発性も重要な鍵になってくるだろう。

## (2) 里山管理の手法の提案

多摩地域の里山は、地域の経済・社会構造の変化によって、必ずしも十分な維持管理が行われていない状態になっている。八王子市堀の内地区における雑木林ボランティアや里山農業クラブの活動など、保全に向けた努力は徐々に始まってはいるが十分ではない。恵泉女学園大学に関して言えば、近隣どころか所有している自然観察林の管理さえままならない状況にある。まずは、足元の大学の自然観察林において、めかいづくりの実践者や里山の維持管理に携わっている方々に直接の指導を仰ぎながら、めかいづくりが可能な形にまでシノダケを育成させつつ他の植物と共生させる里山管理の手法を構築し、地域に提案していくことも本研究の新たな方向と考えている。

## 5. 多摩地域住民との連携

産業としてのめかいづくりが衰退した今日において、めかいを作れる人は減少しつつある。きつい厳しい仕事であったという記憶も残るめかいづくりを、ただ伝統であるということだけで維持し続けるのは困難であろう。恵泉女学園大学における地域貢献活動の一つとして、現在の、またはこれからのめかいづくりにどのように関わっていくのかは考慮を要する点である。

多摩地域において、新たな楽しみとしてめかいづくりを行っている、あるいは行おうとしている人々がいらっしゃることを、本研究の過程で知ることができた。それは、伝統としてのめかいづくりをふまえた、新たな創作としてのシノダケ細工へと発展していく可能性がある。めかいの原料であるシノダケの側面から、江戸時代からニュータウン開発以前の里山の姿や、現在行われている里山管理のあり方とは異なる、現代に適応した里山の管理のあり方が生まれる可能性もある。こうした地域住民主導による新しい動きにも注目しつつ、創造的に協力していく姿勢が必要なのではないだろうか。

## おわりに

この研究は、恵泉女学園大学の教職員と学生達で形成している地域貢献グループのたまたま多摩の会の数名のメンバーによる話し合いからスタート

した。しかしながら、このメンバーは、めかいそのものやめかいづくりには素人であった。地域活動を通じて知りあった何人もの方々にアドバイスをいただき、また研究メンバーに加わっていただき、まずは資料集めとその分析を進め、機縁方式による聞き取り調査を進めてきた。

初年度の成果は、上記にまとめてきたごとく、先行研究を通じためかいづくりの復習と聞き取り調査の整理に終始したといってもよい。しかし、多摩地域に残された里山の維持管理、そこに生えるシノダケ、それを原料とするめかいづくりに結びつけたことは、従来の研究にはない新たな視点と自負している。

まったくのゼロからの出発ではあったが、共同研究者の大役を引き受けていただいた多摩市在住の白石省吾氏と浅井民雄氏には貴重な資料の提供、大所高所からのアドバイスをいただいた。菊地富士江氏には、めかいづくりの実践者として多くの知見と資料の提供をいただいた。また、伊野澄氏、小谷田孝之氏、里山農業クラブのK氏、S氏からは聞き取り調査に際して多大な情報をいただいた。さらに、竹に係わる多くの活動をおこなっている男性ボランティア会議の鈴木幸夫氏、長瀬敏雄氏にも多大な協力をいただいた。研究の後半から活動に参加いただいた大泉麻耶氏には、里山の維持などの新たな見方を紹介していただき、新たな方向を見出す上で大きな成果となった。あらためてここで感謝をしたい。

## 注

- 1) 中村俊亀智著「関東地方タケカゴ細工の展開－日本列島におけるカゴ細工の諸系列(2)－」『国立民族学博物館研究報告』2巻1号 1977年 172-195頁。
- 2) 坪郷英彦著「在来技術の成立要因の分析：多摩丘陵における編組技術と自然・社会環境の関係性」『デザイン学研究』45巻5号 1999年 51頁。多摩市史編集委員会編『多摩市史 民俗編』多摩市 1997年 163-164頁。なお、坪郷は、八王子の絹織物の発展を背景に由井村で盛んになった養蚕用にめかいが使われ始めたとする仮説を提示している(坪郷 前掲論文 54頁)。しかし、めかいづくりと養蚕との関係性について、2009年11月の本研究の第一回研究会において、里山農業クラブ

のS氏は「めかいづくりと養蚕とは関係がないのではないか」という発言をされていた。

- 3) 多摩市史編集委員会編『多摩市史 通史編二 近現代』多摩市 1999年 37頁。
- 4) 樋口久著『市民のための八王子の歴史』有峰書店新社 1998年 167-76頁。
- 5) 坪郷は大正時代、昭和時代初期をめかいづくりの盛期と捉えている(坪郷 前掲論文 51頁 59頁)。
- 6) 「経営と家計の分離」と「資本の有機的構成の高度化」はそれぞれ、近代資本主義に対するマックス・ウェーバーとカール・マルクスによる洞察であることは言うまでもない。
- 7) 多摩市史編集委員会編 1999年 367-375頁。多摩市史編集委員会編1997年 163頁。
- 8) 松田操・近藤茂著「メケエづくり」『雑木林と人々のくらし』多摩市文化振興財団 1990年 114-115頁。多摩市史編集委員会編 前掲書1997年 175-176頁。
- 9) 松田・近藤 前掲論文 95-96頁。
- 10) 多摩市史編集委員会編 前掲書 1997年 263-264頁。それは篠屋と呼ばれた。
- 11) 同上 166-167頁。
- 12) 坪郷 前掲論文 53頁 58頁。なお、この仮説の提案者である坪郷自らの言葉では、めかいづくりの主な担い手は「小作農クラス」に対応する「下クラス」の農家であったと表現されている。本稿では、この重要な仮説はさらなる実証研究を必要とする課題であると考え、あえて「小作農」という限定的な表現を用いず、より広い階層を指し示しうる「零細な農家」という表現を使用した。
- 13) 多摩市史編集委員会編 前掲書 1997年 125-360頁。なお、以下で挙げた論考には、戦前の農村における在来産業の女性労働の実態をジェンダーの視点から再検討する研究が含まれており、めかいの生産者について考察する際に参考になる。谷本雅之著「近代日本の女性労働と『小経営』」、長野ひろ子・氏家幹人・桜井由幾・谷本雅之編『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房 2003年 144-87頁。姫岡とし子著『ジェンダー化する社会－労働とアイデンティティの日独比較史』岩波書店 2004年 ジャネット・ハンター著(安部武司・谷本雅之監訳)『日本の工業化と女性労働－戦前期の繊維産業－』有斐閣 2008年。
- 14) 多摩市史編集委員会編 前掲書 1997年 161-162頁。
- 15) 同上 186頁、坪郷 前掲論文 58頁。

- 16) 同上 56頁。戦前の日本の織物業に存在した男女間の分業に関する相似した認識をジェンダーの社会的構成として捉えつつ、これを批判的に検討した姫岡の考察(姫岡 前掲書 65-96頁)も参照されたい。めかい研究においても検討すべき問いであろう。
- 17) 機織は農家の嫁の「副業」であり、また嫁入りや良い嫁の条件であるという風潮の中で、西陣織は例外的に、男性の職場と見做されたが、西陣の男たちは「普及品」ではなく「高級品」を作る「職人」として高い社会的評価の対象となった(姫岡 同上)。この非対称性の指摘は、多摩のめかいづくりの研究にも示唆を与えるかどうか、検討に値するであろう。
- 18) マイケル・ポランニー著(佐藤敬三訳)『暗黙知の次元－言語から非言語へ－』紀伊国屋書店 1980年。
- 19) 坪郷 前掲論文 56頁 58-59頁。
- 20) 同上 59頁。
- 21) 石井寛治著『日本経済史【第2版】』東京大学出版会 1991年 114-123頁。中村隆英著『日本経済－その成長と軌跡【第3版】』東京大学出版会 2008年 62-65頁。一方、多摩では、地租は、概ね、従来よりも大幅な増額となったが(多摩市史編集委員会、前掲書、1999年、93-95頁)、その後、松方デフレの影響などと相俟って、農村の窮乏化が進み、武相困民党事件と呼ばれる急進的な農民反乱が発生した(樋口 前掲書 214-218頁、多摩市史編集委員会編 1999年 145-150頁)。これが、めかいづくりの全盛期を迎えようとする時期の多摩農村の姿であったといえよう。
- 22) 同上 275-277頁。
- 23) 同上 79-89頁。金融恐慌によってめかいは半値になったという。めかいづくりを行っていた農家の窮状を推し量りうる事実である。
- 24) 松田・近藤 前掲論文 73頁。
- 25) 橋本寿朗・大杉由香著『近代日本経済史』岩波書店 2000年 46-49頁、87-91頁。中村 前掲書 85頁。
- 26) 松田と近藤は、めかいが「手間のかかる割には収入にならなかったこと」がその衰退の一因だとしている(松田・近藤 前掲論文 73頁)。
- 27) 坪郷 前掲論文 59頁。
- 28) 多摩市史編集委員会編 前掲書 1997年 301頁。

- 29) 中村 前掲書 80-86頁。以下の文献は在来産業研究に関する有益なレビューである。谷本雅之著「在来産業の変容と展開」石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 I 幕末維新时期』東京大学出版会 2000年 153-206頁。
- 30) 養蚕・製糸・織物業に関する影響力のある経済史的研究をものした石井の見解(石井 前掲書 208-219頁)を参照されたい。
- 31) 谷本 前掲論文 2000年 166頁。織物業の事例において出稼ぎという選択肢が存在するにもかかわらず、農家の女性が家内工業を副業とするのは、「農家世帯自身の再生産『戦略』の一環」であると説明した谷本雅之の先駆的研究(谷本雅之著『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会 1998年 466-467頁)は、農家の行為主体性への着目を通じて多摩のめかい研究に重要な示唆を与えるであろう。
- 32) 『多摩市史 民俗編』は多摩の農民の生活を「自給自足の暮らし」と特徴づけている(多摩市史編集委員会 前掲書 1997年 271-287頁)。
- 33) 講座派の系譜を引く石井の見解と自らを近代化論者と規定する中村の見解を比較されたい(石井 前掲書、中村 前掲書)。
- 34) 里山農業クラブを訪問して聞き取りを行った際に聴取した内容。
- 35) 「事例(1) 田中登氏」多摩市史編集委員会『多摩市叢書(11) 多摩市の民俗(メカイ<目籠>関係資料』多摩市 1996年 15頁。
- 36) 例えば、「王禅寺の篠は土質の関係か、細工物に合う固さの篠であったという」など。「事例(4) 峰岸シゲ子氏、野島祐一氏」多摩市史編集委員会 前掲書 1996年 23頁。伊野氏への聞き取り調査からも同様の情報が得られた。
- 37) 「(メケエつくりに適しているのは) 枝の出ていないまっすぐにすうっと延びていて、節のマとマ(間隔)の長い一年目のを選んで用いる。節のマとマの長いものを用いるのは、節のマとマが近いと出来上がったメケエの見た目が汚らしいからである」。「メケエつくり」『雑木林と人々の暮らし』多摩市文化振興財団 1990年 98頁。小谷田氏への聞き取り調査からも同様の情報が得られた。
- 38) 東季実子・小林達明は、アズマネザサの生育の促進・抑制に関わる要因としては土壌pHがもっとも大きな影響を与えるとする。「アズマネザサ(*Pleioblastus chino* Makino)の生育に及ぼす植生・土壌・地形の影響」『日緑工誌』29巻1号 2003年 131-134頁。



- 39) ただし、このときに採取した場所は継続的に採取できないことが後ほど判明した。そのため、別の日に改めて裏山の中を見て回り、適する場所があることが分かった。それについては第二章4.(4)で言及した。
- 40) 多摩市「多摩市史叢書(11)多摩市の民俗(メカイ<目籠>関係資料)」1997年あるいは松田操・近藤茂著「メケエつくり」『雑木林と人々の暮らし』多摩市文化振興財団1990年など。
- 41) 例えば、財団法人多摩市文化振興財団主催の「暮らし体験クラブ 荷造りバンドでメカイを作ろう！」(2009年2月11日開催)や学校向け出前プログラムの一環としての「クラフトテープでめかいをつくろう！」などがある。  
(<http://www.parthenon.or.jp/rekishi/pdf/leaflet.pdf> 2010.03.24)
- 42) 東・小林 前掲。
- 43) 養父志乃夫 亀山章編「雑木林の植生管理」ソフトサイエンス社1996年162頁。
- 44) 2010年2月に、千葉県成田市で竹製品を取り扱っている藤倉商店を訪問し、同店代表の藤倉良夫氏からシノダケ製品に関する聞き取りを行った。
- 45) 多摩市史編集委員会 前掲書、坪郷 前掲論文など。
- 46) 坪郷英彦「埼玉県秩父地方における技術文化の変容」『デザイン学研究』48巻1号2001年7頁。
- 47) 例えば、宮城県岩出山地区(現在の大崎市)や岩手県一戸町鳥越地区などがある。鳥越地区の竹細工は、NHK「こんなステキなにつぼんで 観音さまと竹細工」(2010年3月3日(再)放送)で取り上げられた。
- 48) 「広報よこはま栄区版」平成20年5月号によれば、シノダケを割って編んだ円形の大きな笊で、横浜港の中で石炭の運搬など、また道路工事の際土砂の運搬の道具として使われ、横浜の上郷地域の特産にもなっていた。
- 49) 山口智子のシリーズ「掛けたくなる軸」は朝日新聞の『AERA』2009年5月4日号-7月6日号に連載された。
- 50) 松井健「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民俗の技術 現代民俗学の視点I』朝倉書店1998年247-254頁では、マイナー・サブシステムは次のように定義されている。
- (1) 最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている生業

- (2) 消滅したところで、たいした経済的影響をおよぼさないにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきたもの。しかし、経済的意味は少しでもあることが重要
- (3) きわめて身体的な、自然のなかに身体をおき身体を媒介として対象物との出会いを求める行為

経済的な側面が皆無ではないが遊びの要素が強く、熟練するためにはかなりの努力を要するが当事者には楽しみとして捉えられており、自然環境を熟知することによって持続的に続けられるような種類の生業を指す。例として水田での漁撈、ニホンミツバチの養蜂などが挙げられる。

- 51) 田中優子編『手仕事の現在－多摩の織物をめぐって』法政大学出版局 2007年 129頁には、多摩地域で二代にわたって草木染めに従事する方の例が参考になるだろう。

「父は姿勢を正しくすることを伝えてくれました。『いいものを染める』『いいものを作る』という気持ち、そして『遊び心』です。何時間かけるか、ということではなく、遊び心があって、いいものを作れば生活に潤いが出る、と思えば手間を惜しみません。その手間はさまざまなかけ方があります。染材をとって置いて、三〇回染め重ねていい色になる場合もあります。とっておくとだめになってしまうこともあります。生活の中から、それは発見してゆくのです。また環境破壊につながるような植物の採り方もできません。身近なものを使って染めればいいのです」

## 引用および参考文献

- 石井寛治『日本経済史【第2版】』東京大学出版会 1991年
- 石田涇源・加藤明「竹細工に生きる」解放出版 1990年
- 伊藤邦男「南佐渡 小木の花・名木・美林」佐渡国小木民俗博物館 1990
- 上田弘一郎「竹づくし文化考」東京新聞社 1986年
- 内村悦三「竹の魅力と活用」創森社 2004年
- 沖浦和光「竹の民俗誌」岩波書店 1991年
- 小木町史編さん委員会「佐渡 小木町史 上巻」新潟県佐渡郡小木町 1979

- 小木町史編さん委員会「佐渡 小木町史 下巻」新潟県佐渡郡小木町 1981
- 小出九六生「竹の手仕事人がつづる 竹は無限 無限の竹」オフィスエム 2001年
- ジャネット・ハンター著（安部武司・谷本雅之監訳）「日本の工業化と女性労働－戦前期の繊維産業－」有斐閣 2008年
- 田中優子「手仕事の現在 多摩の織物をめぐって」法政大学出版会 2007年
- 谷本雅之「在来産業の変容と展開」、石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 I 幕末維新时期』東京大学出版会 2000年
- 谷本雅之「近代日本の女性労働と『小経営』」、長野ひろ子・氏家幹人・桜井由幾・谷本雅之編『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房 2003年
- 多摩市史編集委員会編「多摩市史叢書（11）多摩市の民俗（メカイ＜目籠＞関係資料）多摩市 1996年
- 多摩市史編集委員会編「多摩市史 通史編二 近現代」多摩市 1999年
- 多摩市文化振興財団 1990年「パルテノン多摩ミュージアムライブラリー 雑木林と人々の暮らし」1990年
- 坪郷英彦「在来技術の成立要因の分析」『デザイン学研究』45巻5号 1998年
- 坪郷英彦「埼玉県秩父地方における技術文化の変容」『デザイン学研究』48巻1号 2001年
- 中村隆英『日本経済－その成長と軌跡【第3版】』東京大学出版会 2008年
- 中村俊亀「関東地方タケカゴ細工の展開－日本列島におけるカゴ細工の諸系列(2)-1」『国立民族学博物館研究報告』2巻1号 1977年
- 萩生田長吉「多摩のめかい」私家版（不明）
- 橋本寿朗・大杉由香著『近代日本経済史』岩波書店 2000年
- 東季実子・小林達明「アズマネザサ(*Pleioblastus chino* Makino)の生育に及ぼす植生・土壌・地形の影響」『日緑工誌』29巻1号 2003年
- 樋口久「市民のための八王子の歴史」有峰書店新社 1998年
- 姫岡とし子『ジェンダー化する社会－労働とアイデンティティの日独比較史』岩波書店 2004年
- マイケル・ボランニー（佐藤敬三訳）『暗黙知の次元－言語から非言語へ－』紀伊国屋書店 1980年
- 松井健「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民俗の技術 現代民俗学の視点

I』朝倉書店 1998年

室井綽「竹」法政大学出版会 1973年

山口智子「掛けたくなる軸」『AERA』朝日新聞 2009年5月4日号-7月6日号

養父志乃夫 亀山章編「雑木林の植生管理」ソフトサイエンス社 1996

## 佐渡の竹製品の調査

### 1. 両津郷土博物館での聞き取り調査(2009年12月18日)

両津郷土博物館の学芸員の宇治美德氏から聞き取り調査を行った。

「この博物館では、郷土の竹製品を昭和40年頃から収集しているが、この時期は日用品が竹製からプラスチック等の石油を原材料とする製品に転換していく時代であった。展示は昭和57年から行っている。現在では、竹工職人は激減し、高齢化も進んでいる。竹工の盛んであった小木町でも竹工協同組合が解散するなど、竹工は衰退する一方である。現在では毎月の定期市で竹製品を扱う店が一店出るかどうかという程度である。

佐渡の竹工の起源は定かではないが、元禄時代には行われていたのではないか。竹製品は、主に日用品や漁業の道具として作られてきた。北前舟で北海道へ松前かせぎに出かけるなど、北海道とは海運でつながっていた。タケが分布していない北海道へ竹製品を運んで、売っていたようである。北前舟の寄港地でもある前浜海岸には当時から竹林が分布していた。

江戸時代に大地震があり、地震で海岸線が隆起した結果、狭く複雑な入江ができた。そのため、船底が平らなタライ舟が作られるようになり、竹でタガをつくることにより竹工技術が発達した。タライ舟は、現在では国の文化財に指定されている。しかし、その技術を伝承する職人が現在では1人となってしまっているため、技術の伝承のための講習会を開いている」

### 2. 過去に竹細工に携わっていた方からの聞き取り調査(12月19日)

宿泊した民宿又七荘の近所に、かつてシノダケのザル等を作っていた方がいらっしゃるとのことから、その女性にお話をうかがった。

「かつては元小木の部落で10人くらいの職人がいたが、近年は若い人で竹細工を行うものはいなくなった。竹細工は一人前になるまで、三つ組、四つ組の揚げざるを作れるようになるまで3年くらい掛かる。竹山を1つ持っているとそれだけで暮らすことができた。

9月頃から男性が竹を切って竹材とする。竹細工職人は、竹材を割る人、編む人、縁をまく人と別にいた。しかし、10年前までは1人で全ての工程を行った。そのほうが儲けもよかった。竹材としてのシノダケは3年生くらいものが適度な硬さでよい。佐渡では割り竹を薄く剥ぐことを‘ひく’という。シノダケを‘ひく’時に使う包丁(切り出し小刀)の刃には、幅が均一な材が取れるよう、(3mm程度の)溝が作られている。また、溝は半円形となっており、ひいた後の竹材の断面は、肉側がやや盛り上がったかまぼこ型となる。この包丁は鍛冶屋さんで作ってもらっていたが、現在このような包丁を作ってくれる鍛冶屋さんはない」



写真① シノダケ(ヤダケ)加工用の包丁(小木町)  
(2009年12月18日撮影)



写真② シノダケ(ヤダケ)加工後の断面(小木町)  
(2009年12月18日撮影)

### 3. 奥州屋商店での聞き取り調査(12月19日)

現在でも竹細工を販売している奥州屋商店には竹細工の作業場がある。ご主人は既に引退され、竹細工を行っているご主人の息子さんともう一人の方から話をうかがった。

「小木では、もともとシノダケでざるを作っていた。佐渡でシノダケといって使っているものはヤダケである。小木の景勝地である矢島では、良質のヤダケを産した。

シノダケを原料とする竹細工は簡単だが、能率が上がらない。マダケ、ハチクは材を薄くひくための機械が導入されている。ひいた後の竹材の断面がかまぼこ型であるのは、水切れをよくするためである。シノダケは材が弱い、マダケ、ハチクは材を薄くすれば、強くてもよいものがつくれる。竹をひ



く機械には、材が軟らかいシノダケを入れることはできない」

「かつては竹細工を扱う店が小木町だけで170軒あった。江戸時代には北前舟で北海道へ竹細工が送られていた。シノダケでは米揚げざるを作り、千葉の銚子へソバ揚げざるを卸した。米揚げザルは小木が始まりだがソバ揚げザルは東京から作り方が伝わった。文庫はシノダケでは作れない。現在は合羽橋、日本橋の木屋へ卸している。米揚げざるは、縁がシンコ(その年に出たシノダケ)で、ザル部分は3年生以上のシノダケを3枚にひく」



写真③ 竹ひき用の機械と作業風景  
(小木町、奥州屋商店)  
(2009年12月19日撮影)



写真④ シノダケ(ヤダケ)製の  
そば揚げ笊  
(小木町、奥州屋商店)  
(2009年12月19日撮影)



写真⑤ シノダケ(ヤダケ)製の  
米揚げ笊  
(小木町、奥州屋商店)  
(2009年12月19日撮影)

#### 4. 小木民俗博物館の見学(2月19日)

種々の郷土資料が展示されており、竹ザル等の竹細工も種類、数ともに多くのものが保管されていた。その多くは竹製であったが、米揚げざる、ソバザル等のシノダケ製のものもいくつかみられた。

販売コーナーでは、シノダケ製の米揚げざるが販売されていた。「販売用のシノダケ製のものは米揚げざるのみで、地元で生産されている」との説明で

あった。

## 5. 小木のタケ、ササ類について(2月19日)

聞き取り調査の後、小木町の道路沿いに見られるタケ、ササ類の観察を行った。タケ類はマダケが多く、一部にモウソウチクが見られた。ササ類はヤダケが多く、その他メダケがみられた。

通常、ヤダケは節から1本ずつ枝を出すのが多くみられた。種内の変異にとどまるものと思われるが、関東のものとはやや趣が異なるように感じられた。

ヤダケの標本を1点民宿に持ち帰り、民宿の方に確認したところ、「この地域では、ヤダケをシノダケとっている」とのことであった。



写真⑥ 小木町のシノダケ(ヤダケ)  
(2009年12月19日撮影)

補足 収集した文献にみられるシノダケに関する記述

### a) 小木町史編さん委員会「佐渡 小木町史 上巻」1979

「篠竹は佐渡の中でも、小木、羽茂方面のものが背が高く、とくに村山や小泊のタケは質が良いといわれました。小泊方面の竹は戦前までは新町の浜中や、四日町の職人が加工していました。小木にも職人がずいぶんとたくさんいました。対象から昭和十年ころまでは二百人近くも職人がいて、篠竹の利用も激しかったのです。職人たちは仲間をつくって、岬の村々や西三川方面へと泊まり込みで必要の分だけ刈りにいきました。篠竹代はほとんど農家の主婦のヘソクリになりました」

「箆つくりの全盛時には、村のカカや嫁が秋の取り入れの終わるのを待ちかねて篠竹を刈って町へ売りに出たとも言います。その金をシゲイ銭と呼んで、女たちのふところにふかくしまいこまれました。女たちは、二束を背負って町に下りたり、牛の背中に四束、六束ほど付けて

運んだり、また、岬の人は舟で運んできました。篠竹の不良品は越後行きといって越後に売られていったのです」

b) 小木町史編さん委員会「佐渡 小木町史 下巻」1981

「ソバ揚げ箆は、昭和三十五年ころからさかんになりました。そして、生産者のほとんどがソバ揚げ箆製作に転業しました。種類も一般に製作しているものは、直径尺六寸もので、注文によっては、尺七寸、尺八寸、二尺ものもあります。材料は、中心になる輪の竹に孟宗竹を使い、あみ竹は篠竹、縁巻は藤ヅルを使って仕上げます。揚げ箆一枚で七百三十円、タメ箆は一枚六百五十円」

c) 伊藤邦男「南佐渡小木の花・名木・美林」1990

‘竹工の町’「明治の終わりころから昭和のはじめまでは、シノ竹（和名 ヤダケ）で編む口付き米上げ箆づくりが盛んであり、主に北海道・東北へ盛んに輸出し、小木岬の竹林農家の家計を救い小木町の没落を防いだ。大正11年の小木町一覧表には、籠工（箆工）200戸360人とある」

「昭和28年頃になるとビニール製品の出現により、それまで竹にたよっていた部分を一挙に侵しはじめ、新たな試練を迎えた。昭和30年代からは、山本太一・大場浩・数馬浅治ら各氏が新製品の試作に全力を挙げ、真竹で盆箆（盛器）を、シノ竹でそば揚げ・タメ箆づくりを普及させ、昭和50年代になるとお茶用花籠づくりもはじめるようになった」。

‘花籠づくり’「小木町に花籠づくりを指導したのは本田卿雲（昭和2年生まれ。新穂村在住）氏である。（中略）当時別府にいた本田氏に、大分県産業工芸試験所より佐渡小木町の竹細工を指導してほしいという依頼があり、本田氏と佐渡との交流が始まった。

そのころ小木ではシノダケ（和名ヤダケ）で盆箆をつくっており、このシノ竹で茶室用の花籠をつくってはどうかと竹工所に相談し、それでは製品化しようということでスタートした」

## インドネシアのバンブー細工の事例

インドネシアのバリ島Pelaga村およびロンボク島Sumbarun村の籠作りの概要を以下に報告する。なお、この状況はビデオにも収録している。

### 1. バリ島(バリ州)Pelaga村(2009年12月20日)

#### (1) 村の概要

Pelaga村は、バリの中心デンパサールから北に約40km、車で1時間弱の標高800m前後の丘陵地にあるバリ・ヒンドゥー教の村で、人口は、1000名ほど(220所帯)。主要産品は、コーヒー(アラビカ:販売、ロブスタ:自家消費)、野菜、果樹、米(自家消費にも不足)である。この村は、デンパサールにあるNGOの支援を受けて、有機農法(野菜、果樹、コーヒーなど)を核とするエコツーリズムに取り組んでおり、食材・料理は当然、家具・台所用品や農業用品も、村にある地元の資源・技術の活用を進めている。

#### (2) ヒンドゥー教にのっとったバンブー細工づくり

バンブー細工は、先祖伝来の作業であり、バンブー(熱帯の地下茎の短い竹の一種)の切り出しから材料作り、籠作りまで、すべての工程は、男の手仕事であり、女性は、ヤシやバナナの葉の容器作りを担当している。

籠作りで使う道具は、斧(切り出し)、のこぎりと包丁(大型のナイフ)である。バンブー切り出しのときは、下草を刈るための鎌ももって行く。村には、多くの種類のバンブーが自生している。屋根、柱、壁など建築材、椅子、机などの家具、米などの蒸し器、米や塩の保管用の台所用品、収穫した野菜、コーヒーの実あるいは牛の餌となる草の運搬のための用具、そして祭礼のお供え物入れというように、色や太さ、強度などのよって、使用するバンブーを使い分けている。

籠作りでは、バンブー・プティとよばれる乾燥すれば幹が白くなる直径10cm程度のバンブーで、まだ水分の多い2-3年生のものを使用する。作る籠のサイズや種類に応じて、のこぎりでバンブーの長さをそろえるように筒状

に切り、その後、包丁で筒を二割、四割、八割、十六割と割っていく。皮の部分も肉の部分もほぼ同じ幅(2-3mm)で厚み1mm程度のヒゴに仕上げ、肉部分の不要な繊維などは包丁で剥いていく。よく作られるのは、ヒンドゥー教のお祭りに使われる直径15cm程度の籠で、これは、いわゆる六つ目編で作られる。

原料のバンブーに切り出しは、ヒンドゥー暦に従って切り出しの良い日が決まっており、さらにバンブーから水分が“出て行く”午後の時間帯に行く。材料となるヒゴ作りと籠づくり作業は、雨期の農作業に出られないときに、村の集会所に子どもから老人まで男性が集まっておこなわれ、こういう機会を通じて子供たちへの伝承がおこなわれるという。

竹籠作りの作業が半日間とすれば、材料のヒゴ作りには1日間かかり、材料作りに時間がとられるという。ちなみに、直径15cm、高さ10cm程度の六つ目編の籠であれば、一つが20分間程度で作られていた。

これらの籠などは、台所用、農作業用、そして祭礼用に欠かせないものであり、村の中で使われ、製品として村外に販売されることはない。ただし、村で収穫した野菜の運搬籠としては村の外に出されることもある。

村の集会所での籠作りの実演をおこなってくれた数名の男性によれば、「籠などは祭礼に不可欠であり、もし村の男性で籠作りが出来ないと、malu(恥じ)と感じる。男は子どものころから必ずできるようになる」という説明であった。

Pelaga村では、ヒンドゥー教のしきたりが生活や生産活動の規範となっており、バンブー細工もヒンドゥー教の祭礼に不可欠な存在となっている。



写真⑦ 籠作りの材料のバンブー  
(2009年12月20日撮影)



写真⑧ 籠の編み始め  
(2009年12月20日撮影)



写真⑨ 籠編み作業  
(2009年12月20日撮影)



写真⑩ 出来上がった籠  
(2009年12月20日撮影)

## 2. ロンボク島(西ヌサテンガラ州)Sumbarun村(12月22日)

### (1) 村の概要

Sumbarun村は、空港のあるマタラムから北東に約120km、車で2時間半ほどの標高1000mの平地(元のカルデラ湖)にあるイスラム教徒の少数民族サック族の村であり、人口2000人(300世帯程度)である。主要産品は、米(冷涼なため、赤米のみ)と近代農法に基づく各種の販売用の野菜が栽培されているが、果樹は少ない。リンジャニ火山(標高3730m)の登山基地にもなっている。

### (2) 高齢男性の手仕事としてのバンブー細工づくり

バンブーを原料とする細工は、先祖伝来の作業であり、バンブーの切り出しから材料のヒゴ作り、籠づくりまでのすべての工程は、男性がおこなう。周辺の山からバンブーの切り出しは若者・壮年男性が担当し、材料のヒゴ作りから籠づくりまでは、重労働の出来なくなった高齢男性の手仕事となっている。女性は、米の脱穀や精米などを分担している。

籠づくりに使用するのは、直径10cm程度のまだ水分の多い2-3年生のバンブーである。作る籠のサイズや種類によって、50cmから3mほどに長さの筒状に切りそろえ、その筒を厚手の包丁(鉦)で二割、四割、八割、十六割、三十二割と割っていく。皮の部分も肉の部分もヒゴとして使い、その幅は籠の種類によって3mmから15mmで厚みは1-5mm程度である。

籠として重要が多いのが、トマトなどの野菜の運搬用であり、これらは収穫時期になると高齢者が集まって、かなりの数の籠(六つ目編)が作られる



という。このほかには、台所用品としてのコーヒーや塩の保存のための籠や笊、庭におく鶏籠などがある。男の子どもは、山で獲ってきた小鳥をいれる籠を作ることから技術を学ぶという。しかし、この村の男性で細工を行えるのは、今では20-30人程度に限られており、最近の子供たちはこのような細工にほとんど興味を示さないという。

Sumbarun村は、伝統文化の継承を支援しているNGOスタッフによれば、野菜作り（F1種＋化成肥料＋農薬のセット）の拡大によって急速に現金経済に巻き込まれてきているという。これは確実に所得の向上をもたらしているが、その一方で、プラスチック製品（その多くが中国製）などの外部からもたらされる財への依存度が高まっており、先祖伝来のバンブー細工の技術なども、今後は徐々に廃れていくのではないかという話であった。



写真⑪ 籠作り(塩入れ)  
(2009年12月22日撮影)



写真⑫ 籠作り(鶏籠)と材料  
(2009年12月22日撮影)



写真⑬ 出来上がった鶏籠  
(2009年12月22日撮影)

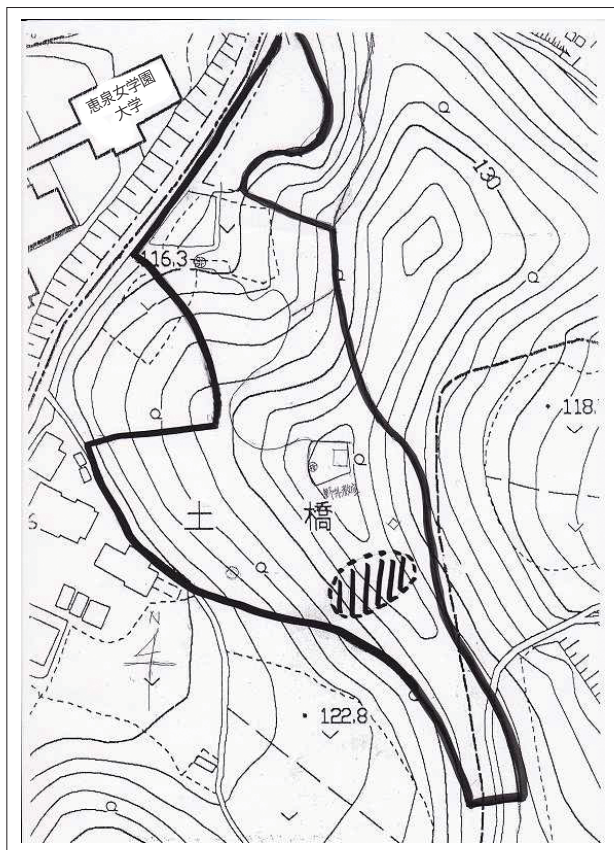


写真⑭ 子どもが作った小鳥入れ  
(2009年12月22日撮影)

### 参考資料一3 2009年度活動記録

年月日	場所	活動内容	参加者
2009年5月30日	恵泉 J205教室	研究会の発足に当たり、研究の目的、活動内容や実施計画などを打合せ	恵泉：谷本、篠田、荒又、定松、漆畑 学生：大石、斉藤、大谷、李 地域：浅井、鈴木、菊地
2009年7月4日	多摩市東寺方 伊野氏宅	多摩のめかいづくりの歴史、めかいづくりの経緯、シノダケの入手方法、めかいづくりの技術および伝承、実践などをインタビュー	恵泉：谷本、荒又、漆畑
2009年7月25日	八王子市松が谷 小谷田氏宅	めかい資料館建設の経緯、多摩のめかいづくりの歴史、めかいづくりの技術や伝承などをインタビュー	恵泉：谷本、篠田 学生：大石、斉藤、大谷、李 地域：浅井
2009年7月29日	多摩市教育委員会 Y氏	多摩市（教育委員会）が行っためかいづくりに関する調査の概要、成果物の保管、伝承者の情報などをインタビュー	恵泉：篠田
2009年10月15日	八王子市堀之内 X氏宅	堀之内里山農業クラブの活動の一環でめかいづくりの係わりなどめかい活動を見学し、里山保全とめかいづくりの係わりなどをインタビュー	恵泉：篠田、荒又 地域：菊地、大泉
2009年11月4日	恵泉 自然観察林J213	恵泉自然観察林周辺のシノダケの生育状況を探索し、シノダケを採取してヒネ（ヘネ）作りを試行	恵泉：谷本、篠田、宮内 学生：篠田3年ゼミ生、谷本2年ゼミ生 地域：菊地、長瀬、鈴木
2009年11月7日	恵泉 C302教室	2009年度の行ったきた文献調査、現地調査などの内容の報告と議論、今後の活動内容や方針の議論	恵泉：谷本、篠田、荒又、宮内、新妻、大泉、金子、堀谷 学生：大石、斉藤、遠藤 地域：白石、浅井、菊地、大泉
2009年11月11日	恵泉 自然観察林および周辺地域	11月7日の活動に引き続き、恵泉の自然観察林およびその周辺地域で、シノダケの生育状況を観察し、シノダケ採取、ヒネづくり、めかいづくりを体験	恵泉：篠田、宮内 学生：大石、斉藤、遠藤 地域：菊地
2009年12月19～21日	新潟県小木町 小木博物館他	佐渡小木町の博物館等で竹細工の状況をヒヤリングする とともに関係する資料を収集、シノダケを活用した製品作り組合は解散し、個人による活動のみの存続を	恵泉：宮内
2009年12月20日、22日	インドネシア バリおよびロンボク	別件の現地調査の一環で、バリ島のPebageおおよびロンボク島のSuntarun村でのパンプー細工の状況をヒヤリングするとともに籠づくりの状況をビデオに収録	恵泉：谷本
2010年2月4日	府中市 かじ福 A氏	めかい包丁を制作する府中市の鍛冶屋かじ福の工房を訪問し、めかい包丁の歴史的背景などのインタビューを行い、めかい包丁を贈る	恵泉：谷本、篠田
2010年2月9日	千葉県成田市 藤倉商店	シノダケなどの竹製品の生産地の情報を得るとともに、竹製品の個性（環境、エコの面）について語を聞き、宮城県および岩手県産のシノダケ製品のいくつか	恵泉：谷本 学生：遠藤
2010年2月11日	恵泉 J205教室	2009年度の研究成果の報告に基づき、報告書の内容を議論し、2010年度の研究の方向性を確認	恵泉：谷本、篠田、荒又、宮内、漆畑 学生：大石、遠藤 地域：白石、浅井、大泉、菊地
2010年3月25日	八王子市堀之内 K氏宅	堀之内里山農業クラブの活動の一環でめかいづくりのめかい活動を見学するとともに、今後の研究への協力などを打合せ	恵泉：篠田

### 恵泉女学園大学自然観察林の シノダケ(アズマネザサ)採取の適地



注:太線内が恵泉女学園大学の所有する自然観察林、点線斜線内がアズマネザサ採取に適した場所